



小中連携、地域社会との連携・協働を通して、社会貢献できる生徒の資質・能力を高めるためのカリキュラム・マネジメントの確立

京都府京都市教頭会 京都市立桃山中学校 井上俊幸

1 主題設定の理由

京都市の学校教育においては、目指す子供像を「伝統と文化を受け継ぎ、次代と自らの未来を創造する子供」とし、その実現には「主体性」と「社会性」の育成が不可欠であると考えている。これらの資質・能力を育成するため、京都市教頭会では、「社会に開かれた教育課程」を確かなものにし、地域社会とのつながりを意識した幅広い視点から教育活動を推進することに取り組んできている。この取組を更に推進するため、子供や学校、地域の実態を踏まえたカリキュラム・マネジメントの確立が不可欠であると考え、本主題を設定した。

2 研究のねらい

子供たちが小学校を含めた9年間の学びの中で、地域の様々な人々と関わりを持ちながら、地域の一員としての自覚や誇り、自己有用感を育てること、また、その過程において、明確な目的意識を持って学びに向かうことをねらいとし、教頭の役割を明確にしたカリキュラム・マネジメントの確立に取り組んだ。

3 研究の経過

1・2年次（平成30年度・令和元年度）

- (1) 課題の共有と研究テーマの設定
- (2) モデル校による実践と検証

3年次（令和2年度）

- (3) 教頭としての役割の整理

4 研究の概要

(1) 全市教頭会・支部教頭会における研修

校長会・教務主任会とも連携して研修を行い、カリキュラム・マネジメント推進のための組織づくりと教頭の果たすべき役割について、情報交換と意見交流を行った。

(2) 資質・能力を高めるカリキュラム・マネジメントにおける教頭の役割に関する研究

以下の①～③をテーマとした各支部の研究によって課題を明らかにし、モデル校の実践につなげた。

①育成を目指す資質・能力の焦点化・具体化

②保護者・地域・小学校との連携

③学校評価の工夫・改善

(3) モデル校による実践と整理

京都市立桃山中学校をモデル校として以下のような実践に取り組み、教頭としての関わり方や役割についての整理を行った。

【京都市立桃山中学校における取組】

次のように学校教育目標及び目指す生徒像を設定し、カリキュラム・マネジメントの実践に取り組んだ。

<学校教育目標>

「ともに生きる

～仲間とともに、地域とともに～」

<目指す生徒像>

- ・主体的に学ぶ生徒
- ・社会性のある生徒
- ・明るく健康な生徒

①育成を目指す資質・能力の焦点化及び目標の具体化と共有

教頭が中心となって学校評価計画を立案し、生徒・保護者・教職員・地域の実態把握とその課題の分析を行った。その結果を基に、学校教育目標及び目指す生徒像を設定した。さらに、その実現のため、育成を目指すべき資質・能力として次の二つを焦点化し、年度当初の職員研修において全教職員での共有を図った。

◎焦点化して育成を目指す資質・能力

- ・自ら問いを見出し課題を解決する力
(主体性)
- ・他者や地域とよりよいつながりを築こうとする態度 (協働性)

これを受け、各分掌・教科・学年等それぞれの教育活動における具体的な子供の姿を見据えた目標設定を行い、教育計画の改善にあたった。年度末には、あらためて現状を把握した上で目標を含めた見直しを行い、次年度の教育計画作成を行った。また、年度当初には、教頭は校長とともにPTA本部会や学校運営協議会で学校教育目



標や学校評価計画についての説明を行い、保護者や地域との共有を図った。

②総合的な学習の時間を中核とした教科等横断的な教育活動の展開

ア) 総合的な学習の時間の改善

総合的な学習の時間において育成を目指す資質・能力を焦点化した。その上で、学校教育目標に基づき、地域連携とキャリア教育を重視した取組となるよう探究課題や活動内容の見直しを図った。さらに、学校運営協議会や地域諸団体の協力の下、地域の幼児や高齢者との異年齢交流、地域住民をゲストティーチャーとして招いての学習、地域行事との連携にも取り組んだ。また、学習発表の機会として、小中合同発表会や地域イベントでの発表も設定した。教頭は小学校の教頭と共にこのような地域連携の中心となり、教育活動のねらいや目指す子供の姿についての説明を丁寧に行うとともに、地域の意見を聞き、教育活動の改善に結びつける役割を担った。

イ) 教科等における授業研究及び授業公開

主体的・対話的で深い学びの実現を目指す授業を共通の土台としつつ、『総合的な学習の時間との往還』をテーマに各教科等で授業研究を行った。総合的な学習の時間における探究課題、活動内容に即した見方・考え方や資質・能力を各教科等で焦点化することに取り組んだ。教頭は積極的に授業参観を行うことで子供たちの姿の見取りや授業評価を行い、研究主任や教科主任とのディスカッションによる成果・課題の分析に結びつけた。

ウ) 教育活動の組織的な検証・改善に関する効果的な手法の開発

i) 適切な評価材料を計画的に準備すること

各分掌部・教科・学年等で具体的な子供の姿を見据えた目標設定を行う際に、その姿の実現をどのような方法で見取るのかを具体的に計画することに取り組んだ。その中で、教頭は学校評価計画の工夫・改善を行った。

ii) ワークショップ型検証・改善会議

学校教育目標の実現を目指す上で中心的な役割を担う教育活動の検証・改善については、全教職員が参加して行うワークショップの実施を基本として取り組んだ。教頭は学校運営協議会や

地域からの意見を反映させる役割を担うと同時に、子供たちの姿や、指導に直接関わった教職員の意見を詳細に把握し、学校評価に活用した。

iii) 保護者・地域との協働による検証・改善

校長、教頭、主幹教諭、教務主任がPTA本部役員会や学校運営協議会に参加し、カリキュラム・マネジメントについての研修を行った。その上で、主要な教育活動については、参観及び評価アンケートを実施し、検証・改善につなげた。教頭はこれらの取組の推進役として、その運営の中心となった。

5 研究の成果と今後の課題

<成果>

○子供たちの資質・能力を高めるためのカリキュラム・マネジメントにおいて、教頭の果たすべき役割が具体的に整理された。

○より多くの教職員や関係者が関わり、具体的な子供の姿を基に適切な目標設定や詳細な評価を行う方法を確認することができた。

【モデル校における成果】

○教育課程が明確なねらいの基に整理され、教職員、保護者、地域、小学校が連携・協働できる体制ができた。

○実践後の分析において、生徒・教職員・保護者・地域のいずれを対象とした評価においても、焦点化した資質・能力の向上が見られた。

<今後の課題>

●モデル校の実践によって得られた成果を各支部や各校の実態に合わせて活用すること。

●各校の実践が子供たちの資質・能力の向上や学校教育目標の実現に結びついているのかを継続的に検証し、そこで明らかになった成果・課題を京都市教頭会として共有し、更なる改善を図ること。

●働き方改革の視点に立ち、教頭の業務改善との両立を図っていくこと。